
凧

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凧

【Nコード】

N5027I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

凧職人藤吉はとてつもなく大きな凧を作ってそれで空を飛んでみようと考えていた。果たしてそれは成功するのか。江戸時代の人達の大空への夢を書いた作品です。

第一章

凧

江戸時代も中頃になるとあまりにも泰平でしかも人々はかなり楽しく暮らせていた。町でも村でも子供達はおもちゃで遊び大人達は芝居や落語といったものを明るく楽しむようになっていた。

そして江戸にいる職人の藤吉もそれは同じだった。しかし彼の場合は仕事がそのまま遊びになっていった。

「おいおい、また随分いい出来だねえ」

「当たり前だろう？」

自分の長屋にわざわざ品物を受け取りにきた大工姿の男に対して白い歯を見せて笑っていた。顔は少しばかり痩せていて肌は黒い目は黒めがちで強い光を放っている。鬚は奇麗に整えてそれがまた実に江戸っ子らしい男伊達を見せていた。

「誰が作った独楽だよ、それは」

「あんだだよ」

「そうだよ、俺が作ったんだよ」

彼もまた胸を張って言う。

「悪い筈がないだろうがよ」

「この凧もいいなあ」

大工は今度は壁にかけてある凧を見た。見れば達磨の顔が描かれたこれまた見事な奴凧であった。そうしたものも見ての言葉だった。

「あんたが作るのは確かにどれもいいね」

「そうだよ、これも欲しいな」

「おう、じゃあ持ってけ」

「釣りはいらねえぜ」

こうして大工はその独楽と凧を買うのだった。藤吉は江戸でも評判の独楽、そして凧の職人なのだ。それで彼の独楽や凧を買いたいという人間が後を立たなかった。

またそれが彼の道楽でもあった。芝居は観ないし落語も聞かない、博打もしない彼はいつも独楽や凧を作っていた。そしてそれをそのまま売っているのである。

「御前さん今日も精が出てたね」

「あつたり前じゃねえかよ」

長屋の中で向かい合って飯を食っているその相手は恋女房のお鮎だ。ふつくらとした顔立ちの彼女に対しても威勢のいい言葉は変わらない。

「俺を誰だと思ってんだよ」

「独楽と凧の職人の藤吉だろ」

「そうよ、江戸で一番のな」

この自負はもう彼にあった。お鮎の言葉に答えながら鰹の刺身を醤油に漬けている。そうしてそれを口の中に入れて白い飯を頬張っている。

「それがこの俺よ、独楽の藤吉よ」

「凧じゃなかったかい？」

「どっちでもいいぜ。とにかくだよ」

彼は言うのだった。

「俺に作れない独楽も凧もねえさ」

「ないんだね」

「どんなものだって作ってみせらあ」

女房に応えながら今度は味噌汁を飲む。豆腐の味噌汁をだ。

味噌と豆腐のその二つの味を楽しみながらそのうえで。彼はまた言うのだった。

「何でもよ」

「もう独楽と凧には絶対の自信があるんだね」

「そうさ」

やはりその自信に満ちた言葉は変わらない。

「何でもよ。作ってやるさ」

「いいね、その威勢のよさ」

お鮎は亭主のその威勢のよさを気に入っているようだった。にこりと笑っている。

「御前さんらしくてね」

「いいんだな」

「本当に独楽と凧だったら何でも作れるからね」

「そうだよ、何だつて作ってみせるさ」

また言うのだった。

「何でもな」

「いいね、じゃあまた明日も頼むよ」

「おうよ、またすぐえ独楽や凧を作つてやるさ」

彼は自分に作れない独楽も凧もないと思つていた。そうして日々その二つを作つて楽しんでいた。しかしそんなある日のこと。彼は饅頭を買いに外に出ていた。

実は彼は饅頭が好きだ。甘いものは全体的に好きである。その中でも饅頭は特に好きだ。その好物の饅頭を買つてそれを楽しもうというのだ。

馴染みの店にまで買いに行こうとするその時だった。ふと道で凧で遊んでいる子供がいた。彼の作った凧ではないがその凧で明るく遊んでいた。

側にはその子供の母親だろうか。お齒黒をした女がいた。その女が子供に対して明るく笑つてそのうえで言つていたのだった。

「本当に凧が好きだねえ」

「うん、大好きだよ」

子供は凧をあげながら楽しく笑っている。凧は空高くあがっている。どうやら凧をあげるのがかなり上手な子供であるらしい。

「こつやつてあげるのがね」

「それにしても上手だねえ」

女も子供が凧を揚げるのを見て感心したように述べた。

「凧をあげるのが。本当にね」

「いいことだよ。凧をあげるのがいいのはね」

「けれどさ、おいら」

子供は「ここでふと言ったのだった。」

「自分も凧に乗ってみたいんだけど」

「あんたがかい」

「そうだよ、おいらも空を飛んでみたいよ」

子供はその空に高々と掲げられている凧を見て女に話すのだった。

「空を。凧でさ」

「おやおや、そんなのはできないよ」

しかし女はそれは笑って否定するのだった。

「そんなのはね。絶対にできないよ」

「無理かな」

「無理だよ、無理」

「こつ言つてまた否定するのだった。」

「そんなの。できっこないよ」

「そうなんだ。無理なんだ」

「今凧を自分であげてるだけで我慢しときな」

女は今度は子供に優しい声で告げていた。

第二章

「それでいいね」

「うん」

そんな話をしていたのだった。子供はそれで仕方なく諦めたようであった。しかし藤吉はその子供の言葉をしっかりと聞いていた。そうしてそのうえで考える顔になるのだった。

「凧で自分もか」

こう考えだすと興味がむくむくと湧いてきた。とりあえずは饅頭を買って一旦家に戻る。そうしてとりあえず仕事を終えてからまずはあれこれと考えだした。

「御前さんどうしたんだよ」

その彼にお鮎が声をかけてきた。お茶を出しながら。

「仕事が終わったら今度は自分で独楽とか作るのにさ」

「いやよ、あれなんだよ」

「あれだつて？」

「この饅頭を買いに行った時にな」

その饅頭を一個手に取って口の中に入れる。白い饅頭の中はこし餡だった。そのびっしりと詰まったこし餡を食べながらそのうえで側に座って同じく饅頭を食べる女房に告げるのだった。

「子供が凧をあげててよ」

「凧をかい」

「そうだよ。その子供が行ったんだよな」

饅頭を食べながら話を続けるのだった。

「自分も凧に乗って空を飛べたらなってよ」

「ははは、またそりや凄いな」

お鮎はそれを聞いてまずは声をあげて笑った。

「人間が凧に乗って空を飛ぶのかい。それでかい」

「そうなんだよ。おかしいことだろ」

「そんなことできる訳ないじゃないかい」

お鮎はその可能性はないと思っていた。

「絶対にね。有り得ないよ」

「おめえもそう思うかい」

「当たり前だよ」

また亭主に対して述べていた。

「そんなのできたらね。それこそ夢だよ」

「夢だよなあ」

だが藤吉はここでは笑わなかった。

「本当によ。そんなことができたらよ」

「そりゃさ。御前さんは凧作らせたら江戸で一番だよ」

「おうよ」

この自負は彼にも充分過ぎる程にあった。

「そうだよ。俺は江戸で一番の独楽と凧の職人だよ」

「その御前さんでもそういう凧なんてできないんじゃないかい？」

「だよな」

女房の言葉に対してぼんやりとした調子だが頷くのだった。

「そんなのはよ。できねえよな」

「できないって。絶対にね」

お鮎はまた笑って話した。

「人間が空を飛ぶなんてね」

女房はこう言っていた。しかし藤吉は違っていた。目を伏せて考える顔になっていた。そうして実際にあれこれと考えているのだった。

その考えのまま暫くいた。しかしある日不意に家の人形を一つ取って凧の一つに括りつけてみた。そうしてそのうえで空にあげてみるとだった。

「おやつ、いけるじゃねえか」

凧をあげてみての言葉だった。人形が括りつけられた凧はそのまま空にあがっていた。彼はそれを見て納得したような顔で頷くのだった。

った。

「これってよ。じゃあ若しかして」

ここでまた考えるのだった。そうして今度は。仕事の合間にあるものを作つていくのだった。

「おいおい、藤吉さんよ」

「こりゃ何なんだよ」

いつも店から買い取りに来ているおもちゃ屋の主人と手代が彼の家に入つてすぐにその横に置かれてあるものを見て驚きの声をあげるのだった。

「やけにばかでかい凧じゃねえか」

「今のところ作りかけみたいだな」

「ああ、ちよつとな」

藤吉は今は普通の凧を作りながらその主人と手代に答えるのだった。

「考えてることがあつてよ」

「考えてることって何だよ」

「こんな大きな凧をかい」

「そつだよ。ちよつとな」

彼はまた二人に対して述べるのだった。

「考えてることがあるんだよ」

「何だよ、この凧で」

「人でも乗せるつもりなのかよ」

「実はそうみたいなんだよ」

ここでお鮎が出て来た。そうして困つたような顔で二人に対して言つてきた。

第三章

「この人ね。何処をどう血迷ったんだかね」

「人が凧に乗るって？」

「それで空でも飛ぶつもりかよ」

「ちよつと考えてるんだよ」

やはりここでも答える藤吉だった。

「ちよつとな。どうかって思ってたよ」

「正気かい？あんだ」

「そんなことできる訳ないだろうに」

「やっぱりそう思うよね」

お鮎は苦笑いを浮かべて二人の言葉に応えるのだった。

「普通はね。そう思うのが道理だね」

「当たり前だよ、人が空を飛ぶってよ」

「烏や雀じゃあるめえし」

彼等は空を飛べるのは鳥か虫だけだと思っていた。江戸時代では

これは当然のことだった。

「絶対無理だって」

「それができたら仙人になれるさ」

「俺は雲は作れねえよ」

しかし藤吉は真面目な顔でこう彼等に返すのだった。座って凧を
作りながら。

「けれどな。凧と独楽は作れるんだよ」

「で、人が乗れる凧を作るのかい」

「やっぱり滅茶苦茶だよ」

二人の言葉は変わらない。

「そんなことはよ。できるものかよ」

「できたら世話ないよ」

「かもな」

一応二人の言葉には頷きはする藤吉だった。

「けれどよ。それでもよ、やっつてはみるさ」

「まあ博打とかそういう身を滅ぼすのじゃないからね」

お鮎はここで亭主の今のおかしな行動に対して庇いはした。

「別にいいけれどね。仕事もちゃんとやっってるし」

「仕事は忘れねえよ」

それはしつかりとしている藤吉だった。

「けれどよ、それでもだよ」

「その凧は作るんだね」

「駄目は承知でやってみるさ」

彼は本気だった。

「それでな。やってみるさ」

「まあこっちは凧と独楽さえよかつたらいいからさ」

「好きにしな」

主人も手代もこれ以上は言わなかった。

「じゃあそういうことでな」

「金はここに置いてくよ」

彼等は独楽と凧を受け取ってそのうえで金を置いて藤吉の家を後にした。彼はその日も自分の仕事が終わるとそのほかでかい凧を作った。そうして暫くして遂にその凧ができたのだった。

「それでよ、御前さん」

「おつよ」

「その凧で飛ぶんだよね」

こう亭主に対して尋ねるのだった。そのほかでかい凧を見ながら。

「その凧で」

「そうさ。ただ糸じゃなくよ」

「ここであるものを出すのだった。それは。」

「この縄を使うんだよ」

「凧なのに糸じゃないのかい？」

「それにはでかいからよ。だから合わせたんだよ」

こう女房に言うのだった。その白く四角い巨大な風を見ながら。

「この風によ」

「本当にこの風飛ぶのかい？」

「俺の風が飛ばなかったことがあったか？」

「このことには逆に聞き返すのだった。」

「それはよ。あったか？」

「いいや」

彼女が亭主の腕前はよくわかっていた。だからこそ否定できた。

「それはなかったよ、今までね」

「それで飛んでる時に壊れたこともなかっただろ」

「続いてこのことも問い返すのだった。」

「そうだろ？それはよ」

「まあね。けれどさ」

それはわかっていても言うとお鮎だった。

「こんな大きな風が本当に飛ぶのかい？」

「信じられねえってのかよ」

「そうだよ、幾ら何でもね」

首を傾げてその目を顰めさせていた。

「普通の風じゃないだろ？やっぱりさ」

「普通じゃなくても風は風だよ」

しかし藤吉はあくまでこう言う。

第四章

「飛べるさ。まあ見てな」

「それでここに人が乗るんだよね」

「そうさ」

それもだと答えるのだった。

「まあ見てるって。凄いのになるからな」

「本当に飛んだらあたしのへそくりで上方の羊羹でも買ってあげようかね」

「何っ、上方の!？」

上方と聞いて藤吉は思わず声をあげてしまった。この時代羊羹は中々贅沢な菓子であった。しかもそれが上方からのものとなると余計にだった。江戸時代は確かに幕府は江戸にあったがそれでも文化、食も含めてその中心は上方、即ち関西だったのである。

「それを俺にかい」

「そうだよ。その時はね」

あらためて答えるお鮎だった。

「あくまでその時はだよ。人を乗せて飛べたらね」

「じゃあ早速羊羹買う用意しておきな」

彼はもう成功したつもりだった。

「そのへそくりでな」

「まあそういつぶうに話はしておくよ」

「おうよ。しかしよ」

ここで彼はふとまた言ってきたのだった。

「それはそうよよお鮎よ」

「今度は何だい？」

「おめえ何時の間にへそくりなんて持っていたんだ？
いぶかしむ顔でこう尋ねるのだった。

「何時の間によ。そんなの作ってたんだよ」

「そんなのはね、いつでも作れるんだよ」

しかしお鮎は亭主のその問いににこりと笑って返すのだった。

「そんなのはね」

「何でい、全然大したことじゃねえみてえだな」

「何言ってるんだよ、女房ともなりやね」

そして今度は女房としての言葉を出すのだった。

「普通にへそくりの二つや三つはだよ」

「作ってるっていうのかよ」

「そうだよ、そんなの朝飯前だよ」

「こう亭主に言うのだった。」

「二つや三つはね」

「そんなの全然気付かなかったけれどよ」

「お金を持つてるのはあたしだよ」

今度はその胸を反らせての言葉であった。

「そんなの何時でもできるってもんさ」

「ちいせえ頃はそんなふうには全然見えなかったのによ」

藤吉はぼやくようにして述べた。実は二人は幼馴染みでもあるの

だ。この時代はそのまま結婚するということも結構あったのである。

「今じゃ立派に女房になりやがって」

「女は十八になって花になって二十五で狐になるんだよ」

「狐かよ」

「それから四十になって狸、六十で貉だよ。覚えておきな」

「ったくよ、変われば変わるもんだぜ」

藤吉はこの時はぼやくことしきりであった。しかしそのぼやきはそのままにして風を外に出した。そうして本当に広い場所に出て人を集めて。そのうえでまずは風を飛ばしたのだった。

「おいおい、本当に飛んだよ」

「嘘だろおい」

藤吉に言われて実際に風をあげた人達が驚きの声をあげた。

「あんなばかでかい風が飛ぶかよ」

「あんなに簡単によ」

「よし、俺の思った通りだ」

藤吉はこの時凧をあげる人達の横に立っていた。そうしてそこからその凧を見上げて満足した声を出して頷いているのだった。

「凧は上手い具合にあがったな」

「それでもさ、御前さん」

しかし彼の横にいたお鮎がいぶかしむ顔で亭主に言っただった。

「これに人が乗れる筈ないじゃないかい」

「いいや、できる」

だが彼はまだ言っただった。

第五章

「このままな。いける」

「いけるってのかい」

「俺が乗ってやるさ、その証拠にな」

「馬鹿を言うんじゃないよ」

自分が乗ると言い出した亭主にすぐに言った。

「若し縄が切れたり不意に落ちたりしたらどうするんだよ」

「俺の尻にそんなことがあるかい」

「あつたらどうするんだよ。御前さん死んじまうよ」

「安心しろ、職人は自分の作ったもんじゃ死ぬことはねえよ」

あくまでこう言う藤吉だった。

「だからだよ。おめえはそこで安心して見ていなよ」

「全く。頑固だねえ」

ここで遂にお鮎も折れたのだった。

「あんたはちいさい頃から変わらないね」

「三つ子の魂百までよ」

彼は尻を見上げたまま言う。空は青く白い雲が実に綺麗にそこにある。そうしてその後ろには富士がある。富士がこれまた青と白の勇壮かつ美しい姿をそこに見せていたのだ。

「だからだ。やってやるさ」

「死なないようにね」

懐から火打石を取り出しそれを亭主の背に打ち合わせる。そうして暫くして尻が下ろされ藤吉はそれに乗った。両足と腹を尻にきつく結びつけた。そのうえでまた尻を飛ばす。

「じゃあよ、藤の字よ」

「やるぜ」

「飛ばすぜ」

左右から尻を持つ人達も縄を持つ人達も彼に言うてきた。

「それでいいんだよな」

「腹括つてるんだな」

「ああ、そんなのは最初から括つてるさ」

「こつ周りの人達に返す藤吉だった。」

「だからだ。やってくんない」

「おうよ、それじゃあよ」

「やるぜ、これでな」

「こつ言つてまずは皆駆けだす。そうしてそのうえで風を作る。」

そのうえで風が離され縄を持つ組の駆け足が速くなる。そうして本当に。風が空にあがったのだった。

「おい、あがつたぞ！」

「空に上つたぞ！」

皆それを見て声をあげる。

「本当にあがつたぞ」

「嘘みてえだな、おい」

「そら見たか！」

そして風から藤吉も言つてきた。

「本当に風があがつただろ。どうだ！」

「ああ、あがつたよ」

お鮎がまた亭主に対して返した。

「御前さんの言う通りだよ。あがつたよ」

「どうでい、何でもやるうと思えばできるんだよ」

彼は風から胸を張つて言っていた。

「空はよ、気持ちがいいもんだぜ」

「そんなにいいのかい？」

「おうよ、ちよつと寒いけれどな」

このことには少し苦笑いを浮かべはしていた。

「それでもいい眺めだぜ。ここから江戸の町が丸見えだぜ」

「江戸の町もかい」

「ああ、そうさ」

彼等は今江戸の外れにいる。そこに広場で凧をあげているのだ。

「はつきり見えるぜ、いい具合にな」

「そうなんだね。じゃあよ」

「おうよ、覚えてるよな」

また凧から女房に対して言うのだった。

「羊羹だよ、上方のな」

「わかってるさ、一本でも二本でもね」

二人で満面の笑顔で上と下から言い合う。江戸の頃のささやかな話である。人は何時でも何かをしようと思えば何かができる、藤吉はそれを為し得た男であったのだ。

凧 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5027i/>

凧

2010年10月8日15時26分発行